
Happy Birthday

玲風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy Birthday

【Zコード】

Z9502A

【作者名】

玲風

【あらすじ】

誕生日がキレイ。誰も祝ってくれないから。深夜のコンビで出会った奏汰。ノリで付き合うことに。他人は嫌いだけど彼なら好きになれるかも。

(前書き)

いつもと違つた感じで書いてみました。感想など頂けると光栄です。

青唯、誕生日おめでとう
久しく言われてない言葉。少なくとも10年は言われてない。10年前に親が離婚した。あたしが6歳の時。父も母もあたしのことを「いらない」って。小学生のあたしは親戚の所に居候した。そこでは叔母さんや従姉妹にいじめられ、小学校でも友達がいなかった。多分従姉妹の奴らが何か言つたんだろう。中学は行かなかつた。年をごまかしてバイトし、金を貯めて、家を出た。叔母さんたちは何も言わなかつた。

ひとり暮らし。めちゃくちゃ楽だった。バイトは大変だったけど、あいつらがいないから平気だつた。

誕生日なんか忘れた。そう、言い聞かせていると本当に忘れてしまつた。誰も祝つてはくれない誕生日。ううん、祝つて欲しくなんかない。みんな、大嫌い。あたし以外の人間はキライ。

「こんちは、バイトちゃん。」
深夜、コンビニのバイトをしてると、にこやかな青年が話し掛けてきた。年は18・9歳。この人はよくここに来る人だ。

- はし？

一応返事をしておく。なんたって大切な「お客様」。この男は優しく接すると付け上がるってどんでもないことを口にした。

だつたんだ。」

シンジヨウカナタ。名前が耳にこびりつく。何故？いやいやそれよりもあたしと付き合いたいとかどうかしてるだろ？。彼の顔をチラリと横目で見ると無邪気な笑みを浮かべていた。――――――

…「ううとうしい笑顔。

「何いってんの？バカじやないの？」

それでもシンジヨウカナタは二二二二二二二。あ～もうーうつとうしい。・あたしはこういう能天氣な奴が嫌い。ムカつく。半分は妬みだけどね。悩みが無さそうな奴。あたしとは正反対。

「確かにアタマは悪いけど、バカじやないよ。君はとっても素敵！いつつも一生懸命働いてるし、お客様への対応もいいし。」

素敵とか面と向かって言う奴なんて初めて見た。二二二の青年。いや、少年？変な奴。

「あはっ、マジでバカじやん。素敵って何よ？意味わかんない！」あたしは気付いたら大声で笑つてた。深夜だったから客はそんなにいない。良かった。こんなに笑つたのは久しぶりだつた。新条奏汰はそれでも二二二している。二二二と付き合つたら、退屈しないかなあ？

「はは、あんたといたら退屈しないよね。決めた。あたし、あんたと付き合つよ。楽しそうだよ。あたしは神田青唯。よろしく。」ノリで付き合つるのは失礼かと思ったけど、暗い生活から抜け出したかった。他人はキライだけど、コイツなら好きになれるかもしれない。

「アオイ…ちゃん。かわいい名前。」

二二二…

かわいいだつて。かわいいのはそっちだよ。

「アオイは誕生日いつ？お祝いするよ。」

今日も二二二。あれから一ヶ月が過ぎた。今日は二回目のデート。話題が誕生日となつた。奏汰の誕生日は7月7日。七夕の日。あたしは？

答えられない。覚えてないもん。

「覚えてない。」

不審に思つたかも知れない。引いちやつたかも。でも、奏汰はあたしの心配を破つた。

「そりなの?じゃあ、10月1日。『あ』が一番初めだから『1』、『お』が『0』、『い』が『1』。」

『お』が「0」、「1」。

そう言つて勝手にあたしの誕生日を決めた。やつぱり、能天氣。でも、退屈しない。ということはあたしの誕生日が一ヵ月後となるわけだ。奏汰なら祝つてくれる。

アリガト

一九四二年

今日は奏汰は外せない用事があるらしい。おばあちゃんの命日だそ
うだ。同じ日になるなんて。奏汰のことだから、何も考えて無かつ
たんだろうな。夜には逢いに来てくれる。

けたたましく電話の音が鳴り響く。

卷之三

21

電話の声は奏汰の母親。事故に遭つて即死。

「嘘。奏汰。お祝いしてくれるって言ったのに。まだ、付き合つて一ヶ月だよ？あたしはまだ、奏汰の誕生日祝つてないよ。奏汰！ねえ、奏汰！！」

何度も何度も叫んだ。涙が止まらない。
あたしはいつのまにか疲れて眠っていた。

そんな中聞こえる声。

それはきっと奏汰の声。

(後書き)

めがくへひくあひだり予想である話ですこません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9502a/>

Happy Birthday

2010年12月18日02時49分発行